

令和 6 年 4 月 14 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01832

研究課題名(和文) 配置薬産業から医薬品産業への変革に関する研究 - 長寿企業を中心に -

研究課題名(英文) A Study on the Transformation from Industry of Placement Medicine Industry to Pharmaceutical Industry: Focused on Longevity Enterprises

研究代表者

幸田 浩文 (Koda, Hirofumi)

東洋大学・現代社会総合研究所・客員研究員

研究者番号：60178217

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：「日本五大売薬」(富山・大和・田代・近江日野・備中)の史的展開を独自の5つの時代区分により整理した。その結果、五大売薬地域は、明治期の政府の和漢薬から西洋薬への転換を目的とする薬事法制の下で、売薬への洋薬の導入、和漢薬の専門化、専門薬剤への特化などの様々な対応策を講じ現在に至っている。しかし、近江日野売薬や備中売薬は、あくまでも個別帳主の個人的努力を中心に配置売薬・家庭配置薬の営業にこだわり、近代的製薬会社を組織できず衰退した。とくに富山売薬の代表薬「反魂丹」の源流が備中売薬の代表薬「延寿返魂丹」であること、富山売薬の代表的企業「広貫堂」の生き残り戦略に長寿企業の特徴を見出すことができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸期から明治・大正・昭和期に至る売薬業に関する研究は、そのほとんどの研究が社会経済史からのアプローチであり、その手法は古文書・史料などの文献を中心とした研究であり、当該地域つまり単一地域のみを社会経済史的研究成果に留まっている。また他の製薬・売薬地域に関しては、当該地域の郷土史・産業発達史の観点から売薬について考察しているに過ぎず、文献・資料・史料としては甚だ乏しい。本研究のように日本五大売薬についての網羅的・総合的な比較研究は皆無であり、わが国の配置売薬(医薬品製造業)の売薬商人(経営者)像や長寿企業像を浮き彫りにするという点でも意義ある研究と考える。

研究成果の概要(英文)：We categorized the historical development of the "Five Great Medicine Markets of Japan" into our own five distinct periods. As a result, these regions have adapted various measures such as the introduction of Western medicine into the sales of medicines, specialization in medicine industry, and focusing on specialized pharmaceuticals. However, Omi-Hino and Bitchi; medicine markets insisted on the business of distributing medicine and household medicine placements, focusing mainly on the personal efforts of individual shop owners, and failed to establish modern pharmaceutical companies, leading to their decline. Particularly noteworthy is that the source of the representative medicine of the Toyama medicine market, "Hangontan," is the representative medicine of the Bitchi; medicine market, "Enju-Hangontan," and we can find the characteristics of longevity enterprises in the survival strategy of the representative company of the Toyama medicine market, "Kokando."

研究分野：社会経済史、郷土史、産業発達史

キーワード：日本五大売薬 富山売薬 売薬行商 行商圈 史的展開 組織変遷 薬事法制 株式会社広貫堂

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

「日本四大[五大]売薬」(富山・大和・田代・近江日野[・備中])地域における行商圈の構築過程は、当時の幕藩体制下での各地の状況により異なる展開をみせた。筆者の「日本四大[五大]売薬」に関する先行研究成果からみて、製薬・売薬業の史的展開を題材とする研究の多くは、古文書や史料を中心とした経営史や社会経済史からのアプローチによる文献研究であり、中にはその発祥の起源が伝説や神話、言い伝えなどの依拠する歴史読み物であることもまみられた。とくに当該地域つまり単一地域のみでの社会経済史的な研究成果に留まっている場合がほとんどである。まれに生産、流通、マーケティング、会計、法学などの視点からのアプローチもみられるが、製薬・売薬に関連する地域・商人に関して、経営理念、企業管理、ビジネス活動、経営に関する技術・技法・技能などの経営学的アプローチで全体的に整理・分析した研究は、申請者の先行研究での文献サーベイでは管見したところほとんど見当たらない。

また日本の医薬品産業の研究については、各種の法改正、国際競争の激化、M&A などによる大きな変化が起きている。大手医薬品メーカーは新薬の研究開発に重点を置き、コスト削減のために外部委託製造をするようになった。数少ない先行研究においても2005年の「薬事法」改正以降、例えば富山においても配置家庭薬産業から医薬品受託製造・ジェネリック医薬品製造へと転換した要因の詳細な事例研究はなされていない。

したがって、本研究のように「日本四大[五大]売薬」についての網羅的・総括的な比較研究は皆無であり、わが国の配置売薬業(医薬品製造業)の売薬商人(経営者)像や長寿企業像を浮き彫りにするという点でも意義ある研究と考える。

2. 研究の目的

本研究には大きく3つの目的がある。

- (1) 独特な経営理念・経営組織形態・流通システムにより、越中富山商人、大和商人、近江日野商人、田代商人(以上「日本四大売薬」といった売薬業(現在の配置家庭薬産業前身)が「地域経営圏」を確立してきた背景・過程、つまり成長プロセスを解明すること
- (2) 江戸時代創業の四大売薬を中心とした斯業が明治期の政府による洋薬重視政策に対して生き残りをかけて、従来の和漢薬の製造・販売を継続する道と新たな洋薬の製造・販売の道を選択するに至った背景・過程を解明すること
- (3) とくに明治期に売薬(配置家庭薬)業としての生き残りの道を選択した現在の配置家庭薬企業の事業承継・後継者育成問題を研究調査すること

3. 研究の方法

- (1) 書籍・論文、各種資料・史料(古文書など)を用いての「日本四大[五大]売薬」地域における行商圈に対する地域貢献、圏内他業者への配慮、保護・監督体制の確立、経営理念の保持・継続などの項目について比較一覧表の作成
- (2) 書籍・論文、各種資料・史料(古文書など)を用いての「日本四大[五大]売薬」地域における地域経営圏つまり行商(営業)先ならびに地域全体としての共通点・相違点の整理・分析ならびに地域経営圏の確立・構築プロセスのモデル化
- (3) 情報・データの整理・検討・分析を通じての研究成果のまとめならびに報告書の執筆

4. 研究成果

まず本研究の前半部分では、四大売薬に備中売薬を加えた「日本五大売薬」地域全体の動向や特徴などを比較検討する前に、これまであまり取り上げられてこなかった備中売薬の代表的売薬「延壽返魂丹」の創業者である備前国の医師の「11代万代常閑」の貢献と、富山売薬との関係を明らかにすることにした。

(1) 備中売薬と11代万代常閑 - 江戸時代中期から幕末まで -

江戸時代中期に備中国(現在の岡山県)で興ったとされる「備中売薬」は、かつて「日本五大売薬」の1つに挙げられる時代もあった(木下, 2009, p.1; 土岐・木下, 2011, p.16; 土岐, 2012, p.118)。備中売薬は備中国の町村を本拠地として、瀬戸内の島々、四国、さらに九州で廻商していた(山陽新聞社編, 1980b, p.600)。備中売薬の中心地は、総社町(現総社市・旧総社市・都窪郡山手村・清音村が合併)であった。備前国では、配置売薬方法の原型となった「大庄屋廻し」なる方法が行われていた。この方法は、その土地の庄屋や有力者の家に売薬を預け、村人が病気になる庄屋のところへ買いに行くという方法である(土岐・木下, 2011, p.10; 土岐, 2012, p.122)。大庄屋は、江戸時代、郡代・代官・郡奉行などの武士による地方階級の支配下にあつて、村役人の最高の役職であった。1つの組を単位として十数カ村、多い場合は数十カ村を支配していた(松井, 1992, p.13)。つまり、岡山地方において、後年の売薬行商で行われていた個別訪問による預託配置・集金方法以前に、庄屋や大庄屋などの村の権力者に預託配置・販売を任せるといった方法が発案されていたのである。後年、この販売方法が富山売薬を経て各売薬に伝わり、や

がて先用後利の概念に基づく個別訪問による配置売薬の方法として、広く売薬業界に定着した。備前国和気町益原村の医師 11 代万代常閑が、この大庄屋廻しを行ったゆえ、配置売薬の元祖のみならず、彼の創薬した延壽返魂丹が富山の返魂丹の源流であるため富山売薬の元祖と呼ばれる所以である。

次に、江戸時代の日本四大売薬と備中売薬の関係を、細谷(1992)の売薬の史的展開の時代区分を敷衍してみよう(細谷, 1992, p.26)。

第 1 の時代区分は、元禄・享保・宝暦の時代(1688~1763)で、細谷は「商路開拓の時代」と名づけている。元禄年間(1688~1704)には、総社町を中心とした地域に多くの備中売薬業者が誕生し、大庄屋廻しを用いての売薬営業が盛んに行われていた(加藤編, 1993, p.117)。備前の 11 代万代常閑が、返魂丹を売薬営業していた元禄年間には、すでに備中売薬は備中一円から隣接する美作や備後にまで売薬の行商圈を広げていた(総社市史編さん委員会編, 1998, p.612)。また浅野の振薬は、1700 年頃には、すでに備中一円から四国方面でまで売り広められていた。

第 2 の時代区分は、明和~寛政の時代(1764~1801)で、「活動の時代」といわれている(細谷, 1992, p.26)。備中売薬地域は、小藩・天領などにより細分化されていたため全体の足並みが揃わず、富山藩のように全体的として藩の保護・支援を受けることができなかった。富山売薬が全国に名を轟かせ、藩と売薬業者が一体となって体制固めをしているのに対し、備中売薬は現状維持、足踏み状態に陥ってしまったのである(細谷, 1992, p.26)。

第 3 の時代区分は、文化・文政の時代(1804~1830)で「販路獲得競争の時代」といわれている(細谷, 1992, p.29)。岡山藩は、寛政 12 年(1800)前後、突然、領内での配置売薬を差し止め(差留)てしまった(総社市史編さん委員会編, 1998, p.609)。その一方で藩は、文化・文政年間(1804~1830)に本格的に藩薬の製造に取り組むようになる。製薬場所をそれまでの城の櫓から郡会所内に移し、御薬方なる役職を設け製薬に当らせたのである。藩は、すでに藩内で定着していた大庄屋廻しで藩薬を独占販売することで、莫大な利益を手に入れことができた(土岐・木下, 2011, pp.14-15)。

第 4 の時代区分は、天保・慶応の時代(1830~1868)で、売薬全般にとって「多事多難の時代」である(細谷, 1992, p.30)。江戸時代末期に近づくると尊王攘夷運動が盛んになってきた。とくに売薬業者の長州・土佐・薩摩藩への出入りは厳しく取り締まられた。その結果、富山・近江日野・大和売薬商人は廻商・行商が困難となり、奥中国に位置する備中売薬は、その間隙を縫って販路を拡張することができた(加藤編, 1993, pp.120-121)。したがって、この時代を備中売薬の「確固たる基礎作りの(基礎を作り上げた)時代」とする向きもある(木下, 2009, p.7)。

(2) 「日本五大売薬」小史 - 江戸時代中期から現代まで -

上述の(1)では江戸時代の備中売薬の史的展開について論考した。そこで次に五大売薬地域の動向や特徴などを象徴する時代名称を付して区分し、それに沿って日本四大売薬と備中売薬の史的展開を比較対照しながら、改めて「日本五大売薬」の小史として整理する。

「商路開拓の時代」から「活動の時代」

元禄・享保・宝暦期(1688-1763)の売薬の史的展開を、細谷(1992)は「商路開拓の時代」と位置づけている(細谷, 1992, 35)。富山藩では、幕藩体制下では厳しく制限されていた他国での商売を許可する「他領商売勝手」の触れを出したり、藩紙会所が薬包紙や包装紙を低廉な価格で配給したり、さらには反魂丹役所が売薬行商人に対する往来や荷物運送の便宜、資金の無利息貸与による援助、差留に対する出先藩への支援などを行ったりしていた(半田, 2006, 7)。一方の備中売薬地域は、藩庁などの後ろ盾による公助、正式な株仲間組合などによる互助・共助もそれほど期待できず、あくまでも自助で事にあたるしかなかった(幸田, 2021, 2)。このように富山売薬が全国の行商圈を席卷している明和・寛政期(1764-1800)を、細谷(1992)は「活動の時代」と呼んでいる(細谷, 1992, 26)。

「多事・多難の時代」から「飛躍活躍の基礎固めの時代」

富山売薬が各地に進出するにつれて、旅先藩において他の売薬行商人と競合し、争奪戦が激化することで、行商圈は外延的に拡大することになる(植村, 1951, 68)。そうした状況下において、備中売薬は元禄・享保・宝暦期の「商路開拓の時代」から「活躍の時代」に飛躍することができず、現状維持・足踏み状態に陥っていた(細谷, 1992, 26)。寛政 12(1800)年、岡山藩は突然領内の返魂丹を含むすべての売薬を差し止めた(山陽新聞社編, 1980b, 600; 細谷, 1992, 13; 土岐・木下, 2011, 23)。この差し止めは寛政 12(1800)年に始まり、解除されたのは天保期(1833-44)頃まで続いた。岡山藩による売薬差し止めが解除されると、備中売薬は早速に大庄屋廻しを復活させると領内の売薬業者も追従し、販路を瀬戸内から対岸の四国の伊予にまで広げた(松井, 1992, 13)。この天保・慶応期(1830-1867) - いわゆる幕末期 - は、「明治以降の発展飛躍時代の確固とした基礎を作り上げた時代」であった(加藤編, 1993, 35)。

「苦難の時代」から「発展飛躍の時代」

明治前期(明治元-22 1868-1889)年、政府の政策は各売薬地域にさまざまな影響を及ぼした。すなわち、富山売薬のように仲間組による支援・援助策や藩による統制機関・施策に大きく依存していた売薬地域は、幕藩体制の崩壊により他の売薬地域に対する比較優位性を失ってしまい、その影響が大和・田代・備中売薬には有利な営業環境になったということである。しかし、こうした幕藩体制の崩壊と政府の政策における売薬業界における有利不利といった状況も長く

は続かなかつた。それは政府による売薬法制が、五大売薬をはじめとする各地の売薬にとって死活問題となるほどの影響力をもつものであったからである。新しい時代に入ってもなお備中売薬では新たに売薬業に従事する者も増え続けていた。そうした状況を細谷(1992)は、明治以降を備中売薬の「発展飛躍の時代」と位置づけている(細谷, 1992, 35)。明治10(1877)年の「売薬規則」により売薬業者(売薬営業者・請売者・行商者)に対して免許鑑札の取得と税金と鑑札料の納付が義務づけられる状況の下で、富山・大和売薬は、法人・組合化した組織・団体を構築し対処した。にもかかわらず備中売薬は、富山・大和売薬のような法人・組合化した組織・団体を作らず、旧幕時代からの個人経営(帳主)による売薬業を継続していた(土岐・木下, 2011, 38)。

「無害無効主義の時代」から「有害無効主義の時代」

富山売薬では、行商人の数が旧幕時代のおよそ3倍にも達していた(深井, 1953, 42)。また大和売薬では株式会社が数社設立され、近代化を推し進め富山売薬を凌駕するほどの勢いであった(中小企業診断協会奈良支部編, 2009, 6)。近江日野売薬では、売薬行政に翻弄される合業仲間による売薬組合の組織化、続いて製剤株式会社の設立などを行い、今後の方向性を模索していた(本村, 2008, 209)。他方、田代売薬は、明治初期には一時行商圏を九州一円から中国・四国地方にまで広げるまで急成長したが、金融逼迫と凶作による米価高騰が引き金となって勃発した、いわゆる「明治23年恐慌」による不況の煽りを受け、久保山(1957)の言葉を借りれば「田代売薬は明治20年代の『深い沈潜期』に突入」してしまった(久保山, 1957, 91)。備中売薬は、明治時代に入っても、幕末期から引き続き売薬業者の数は増え続けていたが、他の売薬のように法人・組合化した組織・団体を立ち上げることなく、旧幕時代からの個人経営による売薬業を続けていた。五大売薬地域に転機が訪れたのは、明治後期(明治38-45 1905-1912年)頃になってからである。

「売薬法の時代」から「組織構築の時代」

富山売薬では、「売薬法」施行により売薬の病症への有効性の観点から、「堂號組織」のもつ協同組合的性格から脱皮し、売薬製造会社に変身する必要に迫られた。大和売薬では、斯界の成長には、煙草製造・織布・染色などの衰退産業や農業からの転身を促進するとともに、行商(配置)者から製剤者へと転身できる可能性を高める必要があった(武知, 1995, 443-444 (639-640))。近江日野売薬も、売薬法の規定では売薬免許をすでに取得している者には一代限りで営業譲渡も可能ではあったが、一時しのぎでしかないため営業を転換せざるを得ない状況に陥った(日野町史編さん委員会編, 2010, 65)。田代売薬では、売薬業者個々人は薬剤師を雇用する製造工場を備えた製薬会社に所属しなければならなかった(久保山, 1957, 98, 100-101)。備中売薬でも、他の売薬地域同様、製薬株式会社の設立が見受けられるようになってきた。

「変革・激動の時代」から「企業整備の時代」

明治末期から大正期全般は、五大売薬をはじめとする売薬地域にとって変革・激動の時代であった。すでに各売薬地域では、明治末期から昭和初期にかけて行商人が急増していた。そこに経済不況が襲いかかり集金が困難になってしまった。その結果、各地の行商圏では過当競争による配置先の争奪戦が繰り広げられ、集金にからむ不正請求や粗悪な不良品が少なからずみられた(武知, 1989, 300, 319-320)。売薬業者・薬種商などは、自らが株主(出資者)所属帳主となり製薬株式会社の設立でこの難局を切り抜けようとした。その結果、近代的製薬技術の下で高品質で病症への有効性の高い製品が製造された。それにより需要が喚起され各売薬の声価が高まるにつれて、全国各地で行商圏の獲得競争が激化していった。昭和17(1942)年、企業整備令が施行され、各売薬地域あるすべての製薬会社は、代表的な配置・本舗家庭薬会社に統合されることになった。

「企業再編の時代」から「過当競争の時代」

昭和20(1945)年、大戦の終結により「企業整備令」が解除されると、地域の代表的な製薬企業に統合されていた家庭薬会社が分離独立したり、廃止されていた企業が復活したりするなど、一気に製薬業界内での企業再編が始まった。昭和25(1950)年の朝鮮戦争(朝鮮特需)を切っ掛けに、昭和20年代後半から昭和30年代前半の高度経済成長期にかけて配置家庭薬業界は戦後の全盛期を迎えることになる。昭和40年代直前では、富山売薬は全国に半分近くの配置薬の販売員を送り込んでいた。大和売薬の三光丸では胃腸薬三光丸の他にもいくつかの薬を製造・販売していたが、昭和40年代頃になると徐々に胃腸薬三光丸1つに絞り込んだところ、同社の財政状況は急速に改善されていった(武知, 1995, 204; 幸田, 2016, 44)。また田代売薬は遠方への配置販売員(行商人)の数を削減するようになった(小林・福山, 1985, 68-69)。そして備中売薬は配置売薬の販売が伸び悩み、さらに後継者難も相まって昭和40年代を境に厳しい時代に突入していった(総社市史編さん委員会編, 1998, 1031-32)。昭和51(1976)年4月、厚生省より医薬品の製造及び品質管理に関する法律、いわゆるGMP(Good Manufacturing Practice)が示され、昭和55(1980)年には、GMPが法制化された。これを契機にドラッグストアやスーパーマーケットでの家庭薬販売が始まったことで、配置家庭薬の需要が落ち込み、配置家庭薬産業は斜陽産業に向かうことになる(中富記念くすり博物館編, 1999, 39; 南都経済研究所編, 2012a, 1; 2012b, 5)。日本五大売薬地域をみても、現在でも配置家庭薬会社は存在しているが、往時のような勢いが無いのが実態である。

(3) 明治・大正期の薬事法制と富山売薬会社「広貴堂」

富山売薬は、江戸中期に創薬・創業し、明治維新を迎えるまで圧倒的な組織力と営業力を誇り、他を寄せ付けず成長・発展を続けてきた。だが明治維新により幕藩体制は崩壊、続く廃藩置県により富山売薬を取り巻く環境は一変してしまった。文明開化の影響を受けて西洋医学・薬学が入ってくると、明治政府は売薬容認から一転して洋薬重視を表明し、売薬（和漢薬・生薬）の規制さらに排除へと法制を転換する。一方、売薬業界は、明治初年、まず失職した大勢の旧士族の売薬業（とくに行商人）への転職により混迷する。さらに明治5年（1872）には、富山売薬の躍進の原動力である、藩による売薬業（とくに行商人）に対する支援・保護と統制を司ってきた反魂丹役所が廃止された。3年（1870）の「売薬取締規則」、5年の同規則の廃止、10年の「売薬規則」による売薬税の導入、16年の「売薬印紙税規則」施行、17年の「売薬税検査規則」布達へと売薬排除を念頭に置いた規制法制が矢継ぎ早に施行された。

配置売薬への規制をみても、幕藩時代には行商による販売面に、明治期以降はそれに加えて製薬面への規制が加わったが、とくに富山売薬業者は売薬規制法制を遵守する柔軟な姿勢をとることで業界存続を図った（二谷，2003，p.44）。例えば、富山売薬業界としては明治5年（1872）11月の文部省への「西洋薬授与願」には「反魂丹代薬には何薬、奇應丸代薬は何種と、洋薬方に振り代え・・・洋薬御授け為し下され渡世永続仕り候」とある（富山県薬剤師会百年史編纂委員会編，1990，p.91）。また富山売薬を代表する（協同組合・堂号組織としての）広貫堂の規則の第1条にも、「明治10年1月第7号ノ御布達売薬規則」「政府の規則」を遵奉することから、売薬規則遵奉の方針は明らかであった（佐藤編，1950，p.124，144）。

富山売薬業界は各売薬業者の存続をかけて（匿名・協同・産業・機械利用・購買といった）様々な性格をもつ組合・結社を組織し、重税政策からの緩和・回避に努めた。その象徴的存在が広貫堂であった。独立自営の売薬業者（行商人）が結合し、結社・堂号組織・株式会社と組織形態を時勢に適合させ、厳しい時の政府の薬事法制に柔軟に対応し維持・成長させてきた。こうした厳しい環境の変化に進取の精神をもって解決策を模索しようとする姿勢が、現在の富山県を代表する地場産業としての医薬品産業にも見出すことができる。

(4) 富山売薬業は、明治期の売薬に対するさまざまな取締規則と課税法制に耐え抜き、現在に至っている。とくに「株式会社広貫堂」は、今も昔も富山県の医薬品地場産業を代表する製薬企業である。広貫堂は江戸期中頃から続く富山売薬を源流とするが、明治期初期に、売薬に対する厳しい薬事法制への対応策として、売薬営業者により組織された新会社である。明治期の売薬は、会社の従業員である行商人個人か小規模業者による自家内での手作業で作られていた。広貫堂は当初売薬結社として組織され、解散を経て一種の産業組合あるいは利用組合の性格を有する組織へと変わっていく。だが、株式会社の設立への道のりは遠く、創立から大正初期まで32年間もかかった。その間、何度かの盛衰を繰り返し業容は拡大するが、明治期の生産面は家内制手工業から工場制手工業に留まっていた。本稿では、厳しい経営環境下において広貫堂が明治期をいかに生き抜いたのかを明らかにした。

筆者は、これまで江戸期中頃以降の富山売薬（富山県）と、他の売薬地域（近江日野 - 滋賀県、大和 - 奈良県、田代 - 佐賀県、備中 - 岡山県、伊佐 - 山口県）との行商圈での競合関係について論じてきた。また伊佐売薬を除く売薬地域は日本四大あるいは五大売薬と称される日本を代表する売薬地域であった。しかし明治期以降、近江日野・田代・備中・伊佐売薬は次第に衰退していった。とはいえ、四大売薬地域の富山県では売薬（配置薬）の製造販売を主力とする「株式会社広貫堂」、奈良県では和漢薬（三光丸）専門の「株式会社三光丸」、佐賀県では鎮痛消炎剤を主力とする「久光製薬株式会社」、滋賀県では代表的和漢薬（正野萬病感應丸・虔修六神丸）を取り扱う「日野薬品工業株式会社」などが、業種あるいは業態を変え営業を継続している。つまり四大売薬地域は、明治期の政府の売薬（和漢薬）から西洋薬（以下、洋薬）への転換を目的とする薬事法制の下で、売薬への洋薬の導入、和漢薬の専門化、専門薬剤への特化などさまざまな対応策を講じ現在に至っている。

そこで本研究の後半部分では、明治期における富山売薬を代表する「広貫堂」を取り上げ、主に、明治期における家内制手工業による製薬過程、**(2)** 売薬への洋薬の受入態勢と業容の拡大、さまざまな薬事法制（売薬の取締と課税）への対応策と企業形態の変遷、海外への売薬進出と事業展開、そして「有効無害主義」への対策の萌芽について取り上げた。

< 主要参考文献 >

- ・幸田浩文（2024）「明治期の家内制手工業と富山売薬会社「広貫堂」の組織変遷」『現代社会研究』第21号，東洋大学現代社会総合研究所，pp.19-28.
- ・幸田浩文（2023）「明治・大正期の薬事法制と富山売薬会社「広貫堂」」『現代社会研究』第20号，東洋大学現代社会総合研究所，pp.23-31.
- ・幸田浩文（2022）「日本五大売薬」小史 - 江戸時代中期から現代まで - 』『経営論集』東洋大学経営学部，第99号，pp.1-17.
- ・幸田浩文（2021）「備中売薬と11代万代常閑 - 江戸時代中期から末期まで - 』『経営論集』東洋大学経営学部，第97号，pp.1-15.

* 紙幅の関係で、以下、上記以外の全ての文献の書誌事項は割愛させていただきます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 幸田浩文	4. 巻 21
2. 論文標題 明治期の家内制手工業と富山売薬会社「広貴堂」の組織変遷	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代社会研究（現代社会総合研究所）	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 幸田浩文	4. 巻 20
2. 論文標題 明治・大正期の薬事法制と富山売薬会社「広貴堂」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代社会研究（現代社会総合研究所）	6. 最初と最後の頁 20-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 幸田浩文	4. 巻 99号
2. 論文標題 「日本五大売薬」小史 - 江戸時代中期から現代まで -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 経営論集（東洋大学経営学部）	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 幸田浩文	4. 巻 97号
2. 論文標題 備中売薬と11代万代常閑 - 江戸時代中期から末期まで -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 経営論集（東洋大学経営学部）	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

幸田浩文の研究者情報 researchmap URL: <https://researchmap.jp/read0027597>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------